

学級経営・実践研究法キャリアアップフィールド

問題解決型の道德教育の理論と実際

学校教育専修 柳 沼 良 太

はじめに

本コースは学校現場の様々な道徳的問題に対応するために道徳授業を新たに開発し実践するという趣旨で設置され、本年度は小学校教諭4名と中学校教諭1名の合計5名がそれぞれの問題関心をもって研修に取り組んだ。本コースの実施方法は既に本誌の第1号で、研修全体の内容構成は第2号で詳しく報告しているため、本年度は研修教員の1人（T教諭）が大学教員（柳沼）の指導の下でどのように指導案を作成し実践したかをケーススタディとして報告することにした。

1. 実施状況

本コースの研修は、例年通り、以下の5つのステップを踏んで実施された。①まず、大学で7月27日に行われた初回の研修において指導教員の柳沼が『問題解決型の道徳授業』をテキストにして、道徳授業の理論と実践方法を詳しく説明する。②次に、各研修教員が自宅研修として8月中旬までの約3週間をかけて指導案を作成して指導教員に提出する。③この後2～3週間をかけて指導教員と研修教員がEメールか面接で4～5回の意見交流を行う。④9月中（2学期の4週目まで）に研修教員が自らの指導案に基づいて授業を実施する。この際、指導教員は研究授業を参観し、実施後に助言を与える。⑤最後に、大学での2度目の研修として実際の研修結果を報告し合い、総括を行う。

本稿は、このプロセスの中でも②から④にかけてのT教諭の指導案の作成と授業実施に関わる部分を抜粋して報告する。T教諭は小学4年生を担当する女性教諭であり、これまでも道徳授業には熱心に取り組んできたが、従来の心情を読み取るだけの道徳授業には飽き足らず、新たな理論や技法を求めて本コースの研修に参加した。以下では、T教諭と指導教員とのやり取りを往復書簡の形式で提示し、研修記録の一例として報告することにした。

T教諭の1回目の指導案レポート（一部抜粋）

(1) **子どもの実態** 4年生の子ども達は友だちの意見を聞こうと心がけたり、声を掛け合ったりできる温かさがある。その一方で、自分達を見つめることは苦手で、「いけないこと」はわかっているが、それを実行に移せない。また、「相手を思いながら自分の思いを伝える」ことが苦手で、自分の思いにばかり走ってしまったり、自分の思いを封じ込めて我慢してしまったりする。

(2) **主題の設定** 仲間が辛い思いをしていれば、自分ができることは何かを考えて手を差し伸べられる人になってほしい。そこで、友情の意義を考え、お互いが幸福になれる解決策を考えられるようにしたい。発達段階でいうと、自分の保身しか考えないレベル2から、自分の行動

が相手に与える影響を考えて仲間の思いを尊重できるレベル3 aの上昇を目指す。

(3) **ねらいの設定** 大きなねらいは、「友達と互いに理解し信頼し助け合う」である。資料に即したねらいは、「リーダー格の子からいじめの指令が出された時の自分や『私』の気持ちを考え問題解決することを通して、自他の幸福を考え、自分の思いを伝えることができるコミュニケーション能力を養う」である。

(4) **資料の概要** 資料は『名前のない手紙』（出典、文溪堂）。テストでいい点をとったことが原因でクラスの女子全員から仲間はずれにされた「私」。ある日のこと、筆箱の中に差出人の分からない励ましの手紙が入っていた。そして、転校していく吉野さんが「私」に対して仲間はずれにしたことを謝った。それが元で「私」はみんなの仲間に戻ることができた。

(5) **資料の分析** 問題は、「いじめの指令（仲良くしていけない）を受けた側がそれに従うかどうか」の選択である。他にも相手のことを思いやることや、正しいことを行う勇気も存在する。事例は「名前のない手紙」という形をとって「私」の心強い味方になっている。このように、どちらも幸福になれる解決策を考え、自分ができることは何かを考えられるようにしたい。

(6) **学習指導過程**

	基本発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
導入	1. 友情について話し合う。 ○友達が困っていた時あなたはどうしましたか？ ・先生に言いに行った。・泣いていたから慰めた。 ○どう行動したらその子が温かい気持ちになれたのかな。	今までのトラブルに対し、どうしてきたか想起し、ねらいとする価値へ方向づける。
展開前段	2. 「名前のない手紙」の91頁まで読む。 ○自分が命令を受けた人間ならどうしますか。 ①言うことをきいて「私」とは話さない。 ・「私」とあまり関わりがない。・逆らえない。 ②見かけは言うことをきくが、陰で仲良くする。 ・ミッコはこわいけど、「私」がかわいそう。 ③ミッコを無視して、構わず「私」と話す。 ・いうことをきく必要はない。・いじめはいけない。 ○自分が「私」なら、どうしてほしいですか？ 3. この後、「私」の学級の仲間はもうどうしたでしょう。 91頁から続きを読む。 ○吉野さんのことをどう思いますか？ ・勇気がある。・立派だと思ふ。	自分の保身があるからこそいいなりにになってしまう、その弱さに共感できるようにしたい。 ・自分の立場だけでなく、その解決策をとれば「私」はどうか考えるようにする。 ・「私」のことを思いやった吉野さんのよさをおさえる。
展開後段	4. シミュレーションをする。友達3人でプールへ行くことになりました。時間になってもA君は来ません。B君は怒って「先に行こう」と言います。あなたはどうしますか？ ①先に行く。・早く泳ぎたいから。・B君が怖いから。 ②なんとか連絡をとる。・置手紙、伝言で伝える。 ③待っている。・きっと事情がある。・悲しむ。	相手（B君）がどうであるかよりも、自分に何ができるかに焦点を置いて話し合う。自分に損でもその解決策をとる理由を考えさせたい。
終末	5. 授業のまとめをする。 ○今日の授業でどのようなことを学びましたか。 ・いろいろな考え方があるってわかった。 ○「お互いがしあわせになる方法」を考えることが大切なんだね。では、これから一週間、お互いが幸せになれるように「しあわせたくさんキャンペーン」をしよう。	・自分でできる方法（スリッパそろえ、掃除、親切な言葉がけなど）など具体的な例を考えて安心してスタートできるようにする。

.....

● 以上がT教諭の作成した道徳授業の指導案であり、それに基づく道徳ワークシートが以下の通りである。尚、このワークシートはスペースの関係上、書き込み欄を大幅に縮小して掲載した。

.....

名前のない手紙 ワークシート

1 友達が困っているのを見た時、あなたはどうしましたか。

友達が困っていた内容	自分がしたこと	その理由

2 リーダー的な人に「仲良くしてはいけない」と命令されたらどうしますか。

解決策	その理由は何ですか。	「私」はどう思いますか	順位

3 今日の授業でどんなことを学びましたか。

--

.....

指導教員からT教諭へのコメント（1回目・抜粋）

指導案の作成、お疲れ様でした。全般的によくできていると思います。以下では、私の気づいた点、助言や提案をいくつか述べてみます。

導入では、「○友達が困っているのを見た時、あなたはどうしましたか?」と発問することになっています。この場合、子どもたちは肯定的に「助けた」「慰めた」くらいしか言わないと思います。できればここで簡単にでも葛藤状況を子どもたちに感じさせたいところです。「どんな時、どんなことをしてあげましたか」と具体例を挙げさせ、「誰にでもそうしてあげたかな」、「強い友達が『助けるな』と言っても、助けたかな」などと聞くと葛藤状況が生じます。

展開前段では、資料を読んだ後に「自分が命令を受けた側の人間ならどうしますか」という発問があります。この種のいじめを分析する場合は、1. いじめの命令を受けた立場、2. いじめを受けた立場、3. いじめを命令した立場の3つを押さえておく必要があります。特にここでは、「あなたが『私』なら、ミツコに何と話しかけることができるか」を考えることが大切です。主人公の「私」の立場からセルフ・アサーション・トレーニングすると効果的です。このあたりはテキストの101-108頁を参考にしてください。

次に、「自分が命令を受けた側の人間」、つまりミツコの同調者の立場については、指導案通りでよいと思います。この命令を受けた側の人間の選択肢の中に、「ミツコに無視は止めようと言う」があってもよいと思います。その理由として、「自分が無視されたらつらいから」、「クラスの雰囲気が悪くなるから」などが出てくればとよいと思います。以上のようないじめ問題の授業に関しては、テキストの116頁以降を参考にしてください。

次に、資料の後半を読んで、「吉野さんのことをどう思いますか」と発問することになります。転校する時になって本音を語る吉野さんの言動は、必ずしも立派とは言えない気がします。解決策を考える際には、クラスの皆がミツコの言いなりになって「私」をいじめると、皆が嫌な気持

ちになり不幸になるが、互いを大切にし合い協力し合うと、皆が幸せになるということを再認識させたいところです。「私」とミツコとクラスの皆が助け合って解決する方向に持っていき、事後指導の「幸せたくさんキャンペーン」に繋げたいところです。

以上の諸点を参考にしていただいた上で、指導案とワークシートをもう一度ご検討ください。部分的に修正するだけでも結構です。T先生の指導案はテーマ的に大変興味深いので、ぜひもう一頑張りしていただきたいところです。

.....

その一週間後、T教諭は指導教員のコメントを参考にして指導案を修正して、以下のようなコメントを寄せて提出した。

.....

T教諭より再提出されたレポート（抜粋）

① 導入1で「友情」について話し合う点では、「別の違う友達が『助けるな』と言っても助けたかな」という補助発問をして、葛藤状況を生じさせるようにしました。決して「できない」ことを責めるのではなく、「自分は困ってる子がいても（状況によって）助けてあげられないことがあるよね」と考えるきっかけにしたいと思います。

② 展開前段で、「あなたが『私』なら、ミツコにどんな方法で何と伝えたいですか」という発問を取り入れました。そうすることで「いじめを受けた立場」の気持ちを考えるようにしました。「一番素晴らしいこの方法ができるといいね」ではなく、いろいろな方法の中で自分が一番とりやすい方法を選択すればいいと思います。今はできなくても、もっといい方法があるとわかっていれば、そのうち成長する時もあるでしょう。

③ 同じく展開前段で、『私』もミツコも幸せになるには何がいけなかったのでしょうか。どういうふうに考えればよかったかな」という発問を取り入れました。先生からは「皆がハッピーになるにはどうすればよいか」という発問でしたが、子どもたちの実態から考えて「いけなかったことは何か」を考えるほうがわかりやすいかと思いました。ここは自分でも楽しみにしています。

④ 展開後段では、②と③の発問を取り入れたので、シュミレーションはなくなりました。多くのことを速く考えるのではなく、一つ一つじっくり考えさせたいと思います。

⑤ ワークシートも変更しました。指導案の発問を変えたので、それに合わせてワークシートの項目も変更しました。ただ、かなり内容が難しくなってしまうように思えます。3ですが、「あなたが私ならミツコに…」という形で自分じゃなく友人や教師を使うのは、もちろん1つの方法ではありますが、直接話さないことは、相手にとって不快感を与えたり、また聞きになってしまうと正しく伝わらない危険性もあったりすることをわかってほしいと思い、あえてこう書きました。修正したワークシートの内容は以下の通りです。

ワークシートの発問内容（修正版）

- 1 友達が困っているのを見た時、あなたはどうしましたか。
- 2 あなたがリーダー的な存在の人に「絶対に仲良くしてはいけない」と命令されたらどうしますか。
- 3 あなたが「私」なら、ミッコにどんな方法で、何と伝えますか。そうする結果、よいこと、またはよくないことは何ですか。
- 4 私もミッコもしあわせになるためには、何がいけなかったのでしょうか。どういうふうに考えればよかったですか。
- 5 今日の授業でどんなことを学びましたか。

指導教員よりT教諭へのコメント（2回目）

指導案の修正、お疲れ様でした。以下ではT先生の書かれた訂正点を中心に検討していきたいと思えます。

導入1において、「別の違う友達が『助けるな』と言っても助けたかな」という補助発問が新たに設定されました。ここではもう少し具体的な問題状況が明らかにされない子ども返答に窮すると思えます。そこで例えば、「意地悪な子がやって来て、『助けるな』と言ったら、どうするかな」とすれば、少し具体的なイメージが得られるのではないのでしょうか。

3ページ目の学習指導過程にある「『私』もミッコも幸せになるには、何がいけなかったのでしょうか」という発問には違和感が残ります。ここでは、「いけなかったこと」だけでなく、「どういうふうにすればよかったですか」をもセットで考えてほしいところです。

次に、ワークシートの設問2で、「あなたがリーダー的な存在の人に『絶対に仲良くしてはいけない』と命令されたらどうしますか」とあります。この場合、「あなた」を主語にすると子どもたちの心理的負担が重くなってしまうため、第三者を主語にして「まわりの子どもたちはどうすることができるでしょうか」と表現を和らげて尋ねることもできるかと思えます。

ワークシートの設問3と4は実質的に内容が重なっていると思えます。ワークシートに載せる設問は、授業時間の都合上、3つから4つが限界かと思えます。そこで、設問3と4を統合して1つにしてしまえないのでしょうか。例えば、設問3をカットして、設問4を中心に「この出来事では、どういうふうにすればよかったですか」と尋ねるだけでも十分だと思えます。

解決策では、単にミッコや「私」や周りの友達を責めるのではなく、お互いの人間関係を調整する方法を考えたいところです。実際に子どもたちに聞いてみると、「先生（親）に言う（相談する）」とか、「主人公の家に電話（メール）する」なども出てくると思えます。子どもたちは、自分たちにできることを一生懸命に考えて、知恵を出し合い、優しくケアし合いながら成長していきます。またT教諭が言うとおりの、子どもたちもいろいろな解決策に気づくことで、少しずつ成長するに応じて解決能力も向上していくと思えます。

この後、一週間後にT教諭から指導案とワークシートの修正版が提出された。以下にワークシートの修正版だけ掲載する。

.....

名前のない手紙 ワークシート (T教諭の修正版)

1 友達が困っているのを見た時、あなたはどうしましたか。

友達が困っていたこと	自分がしたこと

2 あなたがリーダー的な人に「友達と仲良くしてはいけない」と命令されたらどうしますか。

どうする？	なぜそうしますか？	どうなるかな？

3 この出来事で、あなたが「私」ならどうしますか。

あなたなら、どうする？	なぜ？	どうなるかな？
①		
②		

4 今日の授業でどんなことを学びましたか。

--

.....

授業の実際

この後、T教諭と柳沼の間で何度か細かい点についてメールでやり取りをし、9月の第四週目にこの指導案に沿って道徳授業が行なわれた。この授業は小学校の研究授業にも指定され、指導教員の柳沼の他3名の教諭が参観した。

授業は全般的に子どもたちが非常に活発に意見を出し合い、議論し合うことができた。もともとクラス全体が活発であり、互いに意見を出し合い聞き合える関係が築かれているようであった。導入部から子どもたちは自分の経験に即して道徳問題を真剣に考え、盛んに意見を出していた。「友達が困っていたらどうする」の発問には、「助ける」「助けない」だけでなく、「どうしたのと聞いてみる」「一緒に悩む」「何もできない」などの答えが出てきて、熱心に身を乗り出す様子が見受けられた。展開前段で資料をもとに「友達と仲良くしてはいけないと言われたらどうする」という発問に対しても、自分たちの身近な経験をもとにして「もっと話し合う」「親(先生)に相談する」「ダメだよと注意する」「無視する」「言う通りにするかも」など多様な意見が出され、それぞれの意見を比較検討する際にも熱が帯びていた。展開後段で、この物語で「何がいけなかったか」という発問に対しては、いじめの被害者、加害者、傍観者、仲裁者の立場からそれぞれ意見を出して交流していた。途中で議論がやや停滞すると、T教諭が子どもたちの目線や視点を変える発問を臨機応変に取り入れることで、子どもたちの集中力が最後まで持続したと考えられる。展開後段でT教諭が「いじめはいけない」と語気を強めた時、一時的に話し合いが停

滞したが、その後は再び活発に話し合いが進んだ。最後は子どもたちが自分なりにできる方法で友達を助け合い協力し合うことを確認し、「しあわせたくさんキャンペーン」に繋げて終了した。授業後に、指導教員とT教諭と道徳主任の3名で1時間30分程の意見交流を行った。

.....

T教諭の授業後の成果報告（一部抜粋）

いつもの授業よりも活気があり、子どもたちの挙手も多かったが、それは子どもたちが問題を自分たちの問題として真剣に考えたからだと思う。指導案どおりにすると発問が多すぎて、授業が大幅に延長してしまい、子どもたちには迷惑をかけたが、子どもたちは最後まで集中力を切らすことなく問題に取り組んでくれた。授業の全般で子どもたちの生の本音が聞けて有意義だった。また、ワークシートにもたくさん書き込んであり、子どもたちながらもよく考えているようだった。授業の内容と生活が繋がり、子どもたちにとっても考えやすかったようだ。授業を実施した後、「しあわせたくさんキャンペーン」を1週間取り組んだ。今まで当たり前にしてきたことが、実は「人の役に立つ」ことだったり、「自分にできることは何かを考えた結果」だったり、「友達を思う気持ちから出たこと」だったり、改めてその価値を実感できたように思う。子どもたちは本当にすなおに温かく、お互いのことを考えようと努力していた。自分がしたことは、価値のあることなんだと実感できる。それは自己肯定につながることであり、それこそ私がやりたかったことである。

研修を通して自分のやりたいことが少しずつ見えてきて、問題解決型の道徳授業を学ぶことができて本当によかったと思う。問題解決型の発問の仕方は、普段の生活でも十分参考になるので、これからもそれをどんどん活用して、子どもたちがより「しあわせたくさん」な学校生活を送ることができるように努力していきたい。

.....

おわりに

本年度は大学の指導教員と研修教員がメール等で意見交流を積極的に行い、できるだけ授業参観にも出かけることを心がけた。指導案を作成する上での指導教員からのコメントは決して指示・命令ではなく、助言やヒントに留めたため、研修教員も自律性を保ち、やる気を高めながら、対話によって創造的な指導案を作成していくことができたようである。また、授業の指導案作成と授業実践と成果報告を一連のセットで行ったため、指導教員と研修教員の議論が深まると共に協働探究を実証的に進めることができた。

T教諭の他にも優れた教育実践が多かったため、幾人かの研修教員に共同論文の執筆を勧めたが、残念ながら多忙を理由に辞退されたため、今回も大学教員が単独で執筆することになった。今後の課題としては、いかにして研修教員を動機づけ、継続的かつ効果的な教育実践研究の成果報告を行うかである。